継母選び

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

継母選び

【Nコード】

N3008F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

戦国時代。鎌倉において北条氏に仕える渡部五郎は娘の為にその後妻を迎えようとするが選んだのは。家族ものです。

第一章

継母選び

世の中で最も難しい関係の一つが継母と継子の関係だ。これの難しさは何時の時代でも何処の国でも変わりはないから不思議なものである。結局人間というものは何処でも変わりはないということであろうか。そして本質は結局大して変わらないということであろうか。だとすれば飽きてながらもそういうものかと納得してしまう。

それは日本でも同じだし当然室町時代でもそうである。室町時代の終わりのように武士が何かと勇壮な時代であっても女はやはり怖かった。

渡部五郎という侍がいた。彼は前の妻にとかく苦勞させられてきたのだ。

「あれには参った」

彼はよく酒の席でそう述べた。

「全くもって困った女だった」

「どう困ったのじゃ」

「強いのじゃ」

彼は言う。

「とかく強くてな。喧嘩になるとわしをな」

「うむ」

共に酒を飲む仲間の武士達がそれを聞く。皆濁酒を手に話を聞いている。

「わしをむんずと掴んで放り投げるのじゃ」

「いや、それは幾ら何でも」

「嘘である」

武士達はその話を信じようとはしなかった。そう言いながら五郎を見やる。

「では聞く」

「うむ」

五郎を見ながらである。山の様に大きな身体で胸毛が嫌になる程見える。脛毛も腕の毛も相当なものだ。髭も凄いもので顔を覆っている。その顔も凄いもので実際に鬼の絵のモデルになったことがある。彼はこれを大層誇りにしているのである。そうした男なのだ。

「御主を投げてしまうのか」

「左様」

彼は答える。

「本当のことじゃぞ」

「それが信じられんのだ」

「そうじゃそうじゃ」

武士達は口々に述べる。

「化け物でもあるまいしどうやって御主みたいな大男を投げるのじゃ」

「申してみい」

「では言うぞ」

五郎は仲間達のいささかきつい言葉に顔を顰めながらも応えてきた。

「よいか」

「うむ」

「言ってみよ」

「柔術じゃ」

彼は言ってきた。

「それが」

「うむ。それを使つてな」

柔道のもとになっている。室町時代の終わり頃、即ち戦国の世にはかなりの発展を見ていた。彼の先の女房はそれを身に着けていたようである。

「わしを軽々と投げるのじゃ」

「左様じゃったか」

「そうじゃ。本当に軽々とじゃぞ」

彼は言う。

「投げられてしまったのじゃ」

「それはまた」

「難儀であつたな」

仲間達はそれを聞いて言う。正直かなり驚いていた。

「妻に迎えた時は流石に思わなんだ」

五郎はあらためて述べた。

「投げられるとはな」

「してじゃ」

仲間達はここで問うてきた。

「何じゃ？」

「もつその奥方は亡くなられたのだつたな」

「前言つておつたな」

「流行り病でな」

彼は答えてきた。

「ころりとじゃ」

「ころりか」

「うむ、実に呆気ないものじゃった」

彼は嘆息して述べた。そこには無念さが伝わっていた。

「確かに手強い女であつたができた女であつた」

「そうか」

「それは残念じゃな」

「左様。おかげでわしは今寂しい思いをしておる」

彼は嘆息してからまた述べた。

「どうにもこうにもな」

「それではじゃ」

仲間うちの一人が言ってきた。

「御主今は一人身だな」

「うむ。妾を持てる程ではないしな」

残念ながらそこまで地位も富もない。大抵の武士はそうであったが彼もまたそうであったのだ。

「寂しいものじゃ。しかしな」

「しかし？」

「娘がおる」

彼はこう述べてきた。

「もう十三になる娘がな」

「十三といえば」

仲間達はその娘の歳を聞いて述べた。

「もうじきあれか」

「嫁に行くな」

「うむ。それで女房にも何かと役に立つてもらいたかったのじゃが」

彼はここでまた嘆息した。この時代で十三といえばもうすぐ嫁に行くか既に行く年頃である。中々難しい年頃であると言えるのであった。

「残念じゃ」

「それだとな」

また仲間達が彼に声をかけてきた。

「いい考えがあるぞ」

「何じゃ？」

「何、簡単なことじゃ」

「簡単なこととは」

そう述べる仲間に対して顔を向けてきた。

「どういったものじゃ」

「また嫁をもらってはどうぞじゃ」

そのうちの一人が言ってきた言葉である。

「嫁をか。つまり後妻か」

「うむ。どうぞじゃ」

「そうじゃなあ」

五郎はそれを言われてあらためて考え込んだ。

「悪くはないか」

「むしろいいじゃろ」

「どうじゃ」

「そうじゃな」

彼はそれを聞いて頷いた。

「それじゃと」

「よいであろう。やはり女の子には母親じゃ」

「そうじゃな。少なくとも男よりはいい」

別の仲間もそれに頷く。

第二章

「ではな」

「うむ、決まりじゃ」

「わかった」

彼はここまで聞いて遂に決心した。

「では嫁をもらうことにする。してじゃ」

「ここでまた問題が起こってきた。」

「問題は相手じゃ」

「相手か」

「そうじゃ。わしが欲しいと言ってすぐに手に入るものではなからう」

そう簡単にいく話ではない。だからこそ困るのである。

昔も今も嫁を貰うというのは大変だ。その苦勞を思えば。五郎はまたしても難しい問題に当たっていた。

「誰かいるか？」

「さて」

「どうにも」

仲間達はそれには答えられない。首を傾げたり難しい顔をするだけである。

「これがどうにも」

「おらんのう」

「何だ、それでは何の意味もないではないか」

五郎は彼等の言葉を聞いて口を尖らせてきた。それがまるでひよつとこのようである。髭だらけの随分厳しいひよつとこの顔であった。

「相手がおらんのでは」

「後は自分で探せ」

「その通りじゃ」

仲間達は口々にこう述べる。

「じゃからな」

「御主の努力次第じゃ」

「そうか」

五郎はその言葉に顔をなおした。それでまた思索に入った。

「そうなるのか」

「左様」

「ではわかったな」

「うむ」

そのうえでまた仲間達の言葉に頷いた。

「嫁を探す。決めたぞ」

「では早速探すがいい」

「しかしじゃ」

ここで仲間達はまた言う。

「相手はよく選べよ」

「よいな」

「わかつておる」

五郎もそれに応える。

「前ので懲りておるからな」

苦笑いしてこう述べてきた。

「だから。それは弁えておるつもりじゃ」

「だとよいがな」

仲間達はまずはその言葉に応える。

「しっかりしろよ」

「今度はもっとおしとやかなおなごにせい」

「おしとやかじゃな。わかった」

この言葉にも頷く。

「ではやってみる。よいな」

「うむ」

「頑張るのじゃ」

こうして彼は後妻をもらつことになった。それを自分の家に帰り娘にも話した。娘と二人向かい合つて食事を食べながらの話であった。

「新しいお母さん？」

「うむ」

娘に対して頷く。

「そうじゃ。御前もそろそろ年頃じゃ」

「ええ」

娘のみよは父の言葉に応えた。黒髪に楚々とした顔の綺麗な少女であった。とても髭だらけの五郎の娘とは思えない。身体も実に小さく小綺麗な着物を着ている。

「だからじゃ」

「私もうすぐお嫁に行くのに」

「わかつておらぬのう」

五郎は飯である玄米を食べながら述べてきた。そろそろ白米も食べられたりするが彼はこれが好きだった。鎌倉の時の武士のように強くなりたいとの思いからであろうか。あの時代の武士は玄米を主食としていたのである。

「だからじゃ」

「だからなの」

「御前は今大切な時じゃ」

彼は言う。

「だから母親が必要なのじゃ。わかるか」

「それはわかつたけれど」

だがみよはここでもうにも難しい顔をしてきた。箸の動きも鈍っていた。

「ただ」

「ただ。どうしたのじゃ？」

「その新しいお母さんだけねど」

「うむ」

「どんな人かが」

不安げな顔でこう述べてきた。

「やっぱり気になるわ」

「そうか。そうだよな」

「勿論じゃない」

みよは述べる。

「若し私が苛められたりしたらどうするの？」

「その時は俺に言え」

五郎は左手の拳で胸を叩いて述べてきた。

「いいな」

「信じる？」

「いや、ひよっとしたら」

情けないことにここで少し首を捻ってきた。

「騙されるかもな。御前を信じるが」

彼は自分でも認める騙されやすい男であった。今まで何かと騙されてきている。武辺者ではあるがそのせいで損もしてきている。。

実はみよにも結構助けられているのである。

「でしょ？若しその新しいお母さんがずるい人だったら」

「そうだよな。やっぱり危ないよな」

「そうよ。だからね」

彼女は言う。

「新しいお母さんは心の優しい人にして」

「わかった」

それに頷く。

「では優しい女の人にする」

「前のお母さんみたいだね」

「なぬっ」

しかしこの言葉には目も顔も顰めさせてきた。そのうえで娘に問い掛ける。

第三章

「今何と言った」

「だから前のお母さんみたいによ」

みよはまたそれを言ってきた。その顔は五郎のそれとは違い全くもって平然としていた。

「わかった？」

「いや、ちよつと待て」

だが彼はここで娘に対して言う。

「前のお母さんみたいにか」

「そうよ」

娘はまた頷いてきた。やはり平気な顔をしている。

「わかったわよね」

「いや、それはちよつと待て」

だが五郎はそんな娘に対してまた言う。

「それはいかん、いかんぞ」

「どうして？」

「言つぞ」

まずは念を押してきた。

「ええ」

「前のお母さんみたいな人がよいと申すのだな」

「だから言つてるじゃない」

みよは何を今更といった表情で述べる。表情は変わったがそれは五郎が望む表情ではなかった。それどころか望みはしない表情であった。

「優しい人がいいって」

「しかしだな」

五郎は慚然として述べてきた。娘に対する父の顔としてはあまりいいものではなかった。

「それは」

「何か嫌なの？」

「覚えているだろう」

彼はその慚然とした顔で娘に言ってきた。

「わしが以前どれだけやられてきたかを」

「ええ」

みよは何の迷いもなく返事を返してきた。玄米を食べながら平気な様子であった。

「見てきたわ、何度も」

「そうであるう。ではな」

「けれど優しい人だったでしょう」

逃げようとする彼に対してみよは追いつがってきた。それでまた言う。

「だから」

「ああしたおなごでなくては嫌か」

「私はね」

そして捕まえてきた。五郎は逃げられなかった。彼にとって残念なことに。

「わかった」

辛い顔になっていたが頷いた。頷くしかなかった。

「ではそうした母親が欲しいのじゃな」

「うん」

「やれやれ」

みよの明るい言葉に改めて大きく息を吐き出した。心底困っていた。

「泣く子と地頭には勝てぬか」

「何か言った？」

「いや」

これは誤魔化した。誤魔化しても自分の気持ち晴れるわけではないが。

「しかしじゃな」

「ええ」

「強いおなごになりたいのか」

「お母さんみたいだね」

またしてもはつくりとした言葉であった。五郎にとっては一番聞きたくない言葉だがそれがみよの考えであるからどうしようもなかった。

「いいよね」

「ああ。では明日から探してくる」

「うん」

そういうことで彼の嫁選びは強い女をということになってしまった。彼はそのことをまた仲間達に話したのであった。

「とうとうことじゃ」

「何じゃ、結局一緒か」

「それはまた難儀じゃのう」

「いやはや」

彼は濁酒を飲みながらぼやいていた。甘い濁酒が苦く感じる。肴の干し魚もまずく感じる。かなりの重症であった。

「困ったことにのう」

「困ったか」

「困っていないように見えるか？」

「いや」

この言葉にはすぐに仲間達の否定が入ってきた。

「どう見ても困っておる」

「逃げられぬか」

「今度ばかりはな」

そう述べて呻いた。

「どうにもこうにも。困ったことじゃ」

「うつつむ」

「御主が一番望んでいなかったことじゃな」

「ところが娘にとっては一番の望みじゃ」

「ここが彼にとっては辛いところであった。彼は大人しい女を望んでいたがみよは強く優しい女を望んでいたのである。その隔たりが彼の不幸であったのだ。」

「どうにもこうにも」

「で、嫁は捜しはじめておるか」

「一応はな」

彼は答えた。

「だがどうにもこうにも。わしより強い女じゃ」

「御主よりもか」

「そうじゃ。いるか？」

彼は仲間達に問うた。

「そんなおなごが。どうじゃ？」

いる筈もなかるうと思つた。いなければそれで普通の女を妻に迎える気であつた。それでよし、後は娘に適当に言い訳をすればよいのだ。しかしそうそう上手くはいかなかつた。どうやら今回は娘にとつて非常に星の巡り合わせがよかつたようである。逆に彼にとつては最悪であつた。

「おるぞ」

「おるのか」

仲間の一人の言葉を聞いて絶望で顔を歪ませた。

「そんなおなごが」

「小田原にな。一人聞く」

その仲間は静かにこう述べてきた。

「腕つぶしが異常に強くてな。牛ですらも倒してしまつらしい」

「牛もか」

「そうじゃ。そんなおなごがあるそうじゃな」

「また随分強いな」

五郎はそれを聞いて感嘆の言葉を漏らした。今は素直に感嘆の言葉を述べたのだ。

「牛を倒してしまつとか」

「そのおなごならどうじゃ」

仲間はそう進めてきた。

「悪くはあるまい」

「そうじゃな」

五郎は服の袖の中で腕を組んだ。そのうえで思案して述べた。

第四章

「それだけのおなごならな。問題はない」

「では決まりじゃな」

「うむ」

仲間達は言ってきた。

「小田原に言ってみるがいい。そして」

「どんなおなごか自分の目で確かめてみるのじゃ」

「わかった」

こうして彼は小田原へ向かうことになった。馬で一人駆けていく。小田原はこの時は北条氏の本拠地であった。今では鎌倉よりもずっと栄えていた。町ごと大きな城に囲まれている。そんな街であった。

「これはまた」

五郎は小田原の町を見回して目を瞠っていた。

「前に来た時よりもまた」

立派になつていていると思つた。彼は何度か小田原に来てはいるが来る度に立派になつていている感じであつた。それを見て今度は街に対して感嘆の言葉を漏らしたのである。

「見事じゃ。流石は殿様のお膝元じゃ」

彼は北条氏に仕えている。だから殿様と呼ぶのだ。自分の主の城がここまで栄えていて彼は誇らしかつた。その誇らしさを胸に自分の仕事に取り掛かつた。

「これ」

街を行く一人の町人に声をかけた。

「はい」

その町人は彼の言葉に応えて顔を向けてきた。見れば若い男である。

「うむ。一つ聞きたいことがあるのじゃがな」

馬上から彼に問うた。若者は彼をじつと見上げていた。しかし臆するところはなかった。どうやらこうして声をかけられていることには慣れていているようである。

「何でしようか」

「小田原に強いおなごがると聞いたが」

「強いおなごですか」

「そうじゃ。何でも牛を倒す程と聞くが」

「鬼姫様ですか」

「鬼姫様とな」

五郎は若者が出してきた随分物騒な名前に思わず口を尖らせてきた。

「はい。ここを真つ直ぐに行きますと」

「うむ」

「道場があります。そこに通っておられます」

「左様か」

「ええ。実は殿様の家臣の方の娘さんでして」

「そうなのか」

「はい。あまりにも強くてそう呼ばれているのです。その強さときたら」

若者は何か楽しそうな声で述べる。どうやらその鬼姫様というのはかなり物凄い人物であるようだと思わざるにはいられなかった。

「誰も適いません」

「誰もか」

「あまりにも手強いしそうした武辺者なので嫁の貰い手もありません」

「御父君は困っておいでじゃろうな」

「ですから誰でもいいから貰ってくれと申しておられます」

五郎にとっては都合のいい話であった。正確に言うならばみよにとつて都合のいい話である。本音では彼はそんな女は願ひ下げであるのだ。これは変わりはない。

「そういうことです」

「あいわかった」

彼はそこまで聞いて頷いた。

「では一度会ってみよう」

「すぐにどなたかわかりますよ」

「左様か」

「はい、その御姿たるや」

若者はまた楽しそうに言ってきた。どうやらその鬼姫様というのは実に有名な者であるらしい。武勇伝も多くあるのであろう。五郎は彼の話聞いていて心の中でそう思った。

「お武家様そのものです」

「ごついのか」

「はい」

話を聞いて余計に嫌になった。聞くのではなかったと思った。しかし聞いてしまったと言っても話はもう決まっている。彼はその鬼に会うしかなかったのである。

「お楽しみを」

「わかった」

少し身体を小さくさせて述べてきた。

「では行ってみるぞ」

「はい、どうぞ」

「しかしじゃ」

行くところでふと馬を止めて若者に対して言う。

「幾ら何でも。鬼姫というのは言い過ぎではないのか？」

「そうじゃ」

彼は述べる。

「鬼とはのう。幾ら何でも」

「まあそれは御会いしてからです」

若者は笑みをそのままに述べる。

「それからお考え下さい」

「わかった。それではな」

「はい」

こうして彼はその道場に行くことになった。程なくしてその門の前に来たがすぐにドスン、バタン、という激しい物音が門の内側から聞こえてきた。

「ふむ、やつておるな」

五郎はそれを聞いて心の中で呟いた。

「それもかなり」

「まだまだあつ！」

野太い女の声が聞こえてきた。何と女の声なのに野太いのである。

「もしや」

彼はその声を聞いて顔を顰めさせた。

「あの声が」

「来い！もういつちよう！」

間違いなかった。女の声であった。野太く荒々しいがどう聞いても女の声であった。

その声を聞いて間違いはないと思った。ここにいると確信した彼は馬を止めて道場の中に入った。入った途端にまた声が聞こえてきた。「おおりやあ！」

木造りの道場の中で大男が投げられていた。投げているのは女であった。掛け声から先程の野太い声の主であるとわかる。その声に相応しくかなり大柄で荒々しい感じの女だ。山女かと思える程だ。

黒い髪をざんばらにして男の服を着ている。そして周りの者を次から次にちぎっては投げ、ちぎっては投げであった。まるで化け物のようである。

「もし」

五郎は彼女を見ながら足元に転がってきた男に声をかけた。今女に投げられた者である。

「あの女が鬼姫であるか？」

「はい、その通りです」

彼は何とか起き上がりながら答えてきた。見ればあちこち痣だらけだ。それだけ見ても彼女が相当な強さであることがわかる。

「それが何か」

「ふむ、やはりな」

彼はそれを聞いてまずは頷いた。

「そうじゃろうと思った。実はな」

「はい」

男は立ち上がった後も背中を押さえていた。先程投げられてしこたま打ちつけたらしい。それで痛がっているのだ。

「彼女と話がしたいのじゃ」

「鬼姫様とですか」

「左様じゃ。よいかな」

「ええまあ、私は」

彼はそれに応えて述べた。

「構いませんが」

「うむ、それではな」

彼はそのまま前に出て来た。そしてその鬼姫の前にやって来た。

「何じゃ、御主は」

第五章

鬼姫は彼を見て声をかけてきた。本当に大きい。まるで男のようだ。いや、男でもここままで大きいのはそうはいないという大きさであつた。そのうえ筋骨隆々としておりそれだけを見ても女とは思えない。顔こそ整つてはいるがとても嫁に迎えたいと思うものではない。なかつた。だがそれでも五郎は彼女の前にやつて来た。

(これも娘の為じゃ)

決して自分の為ではない。ここが重要であつた。一礼し、そして名乗つた。

「それがしの名は渡部五郎と申します」

「渡部五郎とな」

「はい、鎌倉にいる者です」

「ふむ、鎌倉にか」

鬼姫はそれを聞いて考える目を見せてきた。

「左様か」

「左様です。そして」

彼は言つた。

「貴女と勝負したい」

「ほう、私とですか」

鬼姫はそれを聞いて不敵な笑みを浮かべてきた。

「それはそれは。それでは」

「然る後に」

鬼姫が前に出ようとしたところでまた言つ。

「むっ!？」

「貴女を嫁に貰い受けたい」

「なっ」

「何とっ」

これを聞いて周りの者達まで驚きの声をあげた。今までこんな言

葉は聞いたことがなかったからだ。これで驚かない筈がなかった。

「本気ですか？」

「無論」

五郎は答える。

「冗談でこのようなことは申しません」

「わかりました。その申し出受けましょう」

「おおっ」

「これはまた」

周りの者達はまたしても驚きの声をあげた。この日の彼等は驚きの連続であつた。

「宜しいのですかな」

「はい。父上には私から申し上げておきましょう」

この時代は本人の一存ではとても結婚なぞできはしなかつた。しかし鬼姫がここでこう言えたのはやはり彼女を貰おうという者がいなかつたせいであろう。そもそも鬼と呼ばれているような人物を嫁に欲しいというのは相当な変人である。実際に五郎は変人と言えた。

「それで宜しいですね」

「はい。それでは」

「まだ何か」

結婚の話の後でさらに話を進めてきた。

「貴女の腕前、拝見させて頂きましょう」

「貴方の相手に相応しいかどうかでしょうか」

「いえ」

この言葉には首を横に振る。

「それは違います。実はですな」

「ええ」

「これは娘の為なのです」

「息女の」

「はい」

鬼姫の問いにこくりと頷いてきた。

「その通りです。だからこそ
彼は言う。」

「貴女の強さ、見てみたい。嫁入り前の娘の母親となるのに相応しい腕か。そして心の持ち主なのか」

「実際に組んでみて確かめたいのですね」

「左様。宜しいですか」

「わかりました」

鬼姫も拒みはしない。満面に笑みを浮かべて応えるのであった。

「それでは参ります。宜しいですね」

「ええ」

五郎はそれに頷く。互いに構えを取る。

「では確かめてみて下さい」

「わかりました」

二人はさらに言葉を交あわせる。

「私が貴方のご息女を預かるに相応しいかどうか」

「いざ」

同時に前に出た。そのままぶつかると同時に前に出た。そのままぶつかると同時に前に出た。

五郎は鬼姫の手に掴まれた。その手は実に温かいものであった。

人の温もりをしっかりと持った優しい手であった。今それをはつきりと感じたのだ。

しかしそれは一瞬であった。次の瞬間にはもう彼は投げられてしまっていた。そして壁に背中を叩き付けられていた。軽々といった様子であった。

「如何でしょうか」

壁に叩き付けられそこからゆっくりと床に落ちていく彼に声をかけてきた。

「私は相応しいでしょうか」

「はい」

五郎は床に落ちるとそれに応えた。あまりにも見事に投げられたのでそれに関しては言葉もない。鎌倉、いや北条氏の家臣の中でも

武辺者で通っている彼も唸るしかなかった。

「お見事です。これなら」

「はい。それでは」

鬼姫はその言葉を聞いて満面に笑みを浮かべてきた。そのうえで言った。

第六章

「貴方のご息女、お預かりしますね」

「お願い申します」

こうして彼と鬼姫の縁談が決まった。鬼姫は渡部家に入り鎌倉にやって来た。そのままみよの母親になったのであった。

この義理の母娘は実に仲のよい母娘になった。鬼姫は確かに豪勇無双であり熊でも猪でも素手で倒せるような女であったがその心は誰よりも優しく草花を愛する心さえ持っていた。そんな彼女だからみよも慈しみ見事に育てたのであった。

「お父さん、有り難う」

みよはこのことに対して五郎に礼を述べた。

「優しいお義母さんを迎えてくれて」

「よかったか」

「うん」

彼女は笑顔でこの言葉に頷いた。

「とても。実はね」

「うむ」

娘の言葉に顔を向ける。そのうえで話を聞く。

「寂しかったのよ。お母さんがいなくなつて」

「そうだったか」

「ええ。それで新しいお母さんが欲しかったけれど」

「鬼姫でよかったのだな」

「鬼姫なんかじゃないわ」

みよは義母のその呼ばれ方には口を尖らせて抗議を示してきた。

「いい？」

「何だ？」

「お義母さんはとてもいい人よ。それで鬼だなんて」

「いかんか」

「駄目よ」

口を尖らせたまま述べる。彼女は本気であった。

「そんな呼び方。お義母さんはお義母さんよ」

「うむ、そうか」

娘の言葉に応える。

「ではその呼び方は止めるとしよう」

「お願いよ。それでもね」

ここですっと寂しげな微笑を見せてきた。

「お母さんのことは忘れていないわ。けれどそれと同じ位にお義母さんのことが好き」

「好きか」

「ええ、好き」

この言葉にも迷いが無い。彼女は本心から鬼姫を慕うようになっていた。

「私、お義母さんのおかげで楽しく過ごしてるし」

「それは何よりだ」

「それでね。お嫁にも行けそう」

これが第一の目的であった。それが今果たされようとしていて五郎としても満足な話であった。

「そうか、それではな」

彼はその言葉を聞いて父親として言うてきた。

「婿を今から探すからな」

「うん」

「お義母さんとな。楽しみに待っておれ」

こうして鬼姫と一緒に婿を選ぶことになった。結果として小田原にいる北条家の重臣の嫡男の家に入ることになった。これは氏康公も快諾した。

「鬼姫の薦めならば問題はあるまい」

これが彼の言葉であった。彼も鬼姫のことはよく知っておりその武勇と人柄に惚れ込んでいたのである。だからこそ彼女の言葉を信

じたのである。

「そのようにさせよ。よいな」

「はっ」

家臣達がそれに頷く。この時代の婚姻は主君の承認が必要であった。その主が認めたとすることはそれだけでよしということであった。こうしてみよはその家に嫁に入ることになったのであった。

婚礼の日。鬼姫は白無垢のみよの前にいた。彼女の顔をじっと見て微笑んでいた。

「小田原でも元気でやりなさい」

「はい、お義母さん」

みよは義母に対して笑顔で応える。その横では五郎もその厳しい顔を崩してにこにここと笑っている。鬼姫も彼も親の顔で彼女を見ていた。

「あちらの人のことは私もよく知っています。出来た人です」

「はい」

「ですから問題はありません。けれど」

鬼姫はここで言う。

「けれど？」

「何かあった時は。いいですか」

「はい」

娘を見詰めている。そのうえで熱い言葉であった。

「私に言いなさい。とっちめてやりますから」

「はい、お義母さん」

みよはその言葉を聞いてにこりと微笑んできた。そして義母に言葉返す。

「これからも。宜しくお願いします」

「はい、母親として」

二人は本当の意味で母娘になっていた。その絆は何よりも深くなっていた。五郎はそんな二人を見て自分の選択が間違いではなかったことを確信し静かに微笑んで頷くのであった。

継母選び

完

2
0
7
・
1
・
1
9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3008f/>

継母選び

2010年10月8日15時04分発行